



反逆

私のアンソロジー 4

編集
解説 松田道雄



私のアンソロジー 4

反逆

編集・解説

松田道雄

筑摩書房



私のアンソロジー 4

反逆 編集・解説／松田道雄

編者略歴

松田道雄（まつだ・みちお）

1908年茨城県に生まれる。1982年京都大学医学部を卒業。初め困窮者の結核治療にあたり、戦後は開業医として幼児の治療にあたる一方、知識人のあり方やロシア革命に関する評論を発表。現在は著述に専念している。
（著書）「私は赤ちゃん」「君たちの天分を生かそう」「日本知識人の思想」「ロシアの革命」「革命と市民的自由」「恋愛なんかやめておけ」「われらいかに死すべきか」等。

1971年12月18日 初版第1刷発行

発行者 竹之内静雄

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8
振替東京 4123 Tel. 291-7651
郵便番号 101-91

©1971 第4回配本 装幀／中島かほる
三松堂印刷・永興舎製本

1395-03304-4604

目次

I さまざまの反逆

ある川柳作家の生涯

秋山清 3

反乱者としての人間

小田実 19

明るい廃屋

内村剛介 36

孤立の憂愁を甘受す

高橋和巳 54

女の自立はどういうふうにして可能か

羽田素子 64

女性Ⅱ人間解放にむけて

活動家 84

自分にとって家出とは？

中川恒存 94

叛戦自衛官は告発する

小西誠 103

II 革命の変質

革命の変質

埴谷雄高 123

組織と人間

伊藤 整 135

組織論四十七士

樋口 謹一 143

擬制の終焉

吉本 隆明 156

革命について

鶴見 俊輔 177

普遍的ヒューマニズムの歴史的破産

いいた・もも 191

土着の社会主義

上山 春平 205

変革志向の組織化に伴う論理

所美 都子 220

七回大会の中心問題

生田 浩二 228

III 学生・革命

全学連の思想

武藤 一羊 239

攻撃的知性の復権

山本 義隆 263

暴力と非暴力をめぐる

野村 修 278

永続的反抗の論理

菊地 昌典 293

*

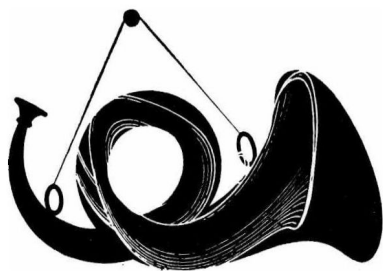
対話ふうの解説「ほんもの」はゆるせない

松田道雄

301

著者略歴

326



I

さまざまの反逆

ある川柳作家の生涯 反戦作家・ツルアキラ——秋山清

大東亜戦争の入口で、一人の川柳作家が高邁の手で死に導かれた。二十九歳の鶴彬である。鶴彬については、ながいこと気にかかっていた。彼がはるか以前に死んで、それから戦争がひどくなり、その戦争が終つてからでももう十五年過ぎてしまった。彼のことを知っている私の知人は、戦後私のまわりにいなくなっていた。あるときふと手にしたアカハタに、長谷川英夫が私もしょしょに働いていたころの鶴のことをかいていたが、アカハタのその記事も十年ちかくもまえだった。私たちが働いていたのは木材通信社という業界新聞の編集部で、日本橋の霊岸橋にちかい事務所から鶴が野方警察署に連行されたまま一年近くそこにとめられて、病気になって死んだこともその長谷川の文章にかいていた。それからまた新日本文学会の第七回大会（一九五四年）のときの短歌俳句部会に出た私が「川柳のことはこの部会でやるべきでは

ないか、川柳に戦後どのような活動があるか知らないが、死んだ鶴彬のことなど埋もれているようだが誰かしらべる必要があるんじゃないか」と発言をしたとき、そこにいた青年が「鶴のことを私は求めているのです」といつて自己紹介したのが、「人民川柳」の青木英夫であった。私は後日青木とあい、鶴の生前について私が知っているわずかばかりのことを話しあつたが、青木はそれから後も鶴のことを調べて昭和三十一年には金沢から出て川柳誌「和」に『獄中の鶴彬』を連載して、反戦の川柳作家鶴彬についてある程度のことをあきらかにしてくれた。青木の熱心だけがそれをなし得たのではなく、すでに終戦後かなり早くから「和」をはじめ、東京の「人民川柳」の人々が鶴のことをたずね、埋れかけていた彼の作品や評論もあつめられて、一昨年金沢の「県民の友」が遺稿をガリ版で連載したりして、彼ののこした仕事か、

ひろい範囲ではないが、見直されようとしてきた。その鶴彬について、私には一つの回想がある。私が鶴としたのは中島国夫の紹介による。昭和十一年一月のことであつた。

中島はそのころ、戸山ヶ原の一隅にあつた陸軍技術本部に軍服で通勤する下士官だったが、夜は背広にきかえて私たちと文学的なあつまりでいっしょになることもあつた川柳人の鳥三平で、二・二六事件後にも私たちの雑誌に協力を続けてくれていた。正月の中島の家のあつまりには、三橋臥竜洞や岡本嘘無ら左翼的な「川柳と自由」の人たちの他に鶴彬がいた。彼の名を、私は「文学評論」や「詩精社」の誌上で川柳人として記憶していた。私が木材通信という隔日刊の業界新聞に見習記者となつたのは、そのときから一年半後の昭和十二年七月一日、その七日後には支那事変が起つて、材木の値段が急騰しはじめたので、市況係りとして深川の木場を回っていた私は忙しさに追われて、意外にはやく木材の流通状況になれることができた。そのある日、受付に鶴が来て立っていた、とみるうちに、こっちの方から企画長の久保田という社の幹部の一人が立って行って彼とはなしていた

が、すぐ私が呼ばれ、三人で町の喫茶店にはいった。鶴の本名が喜多一二であることを、そこでみた履歴書ではじめてしつた。そのときはなしは、こんな風だつた。

「喜多君を木材通信に入れたいのだが、君が紹介者になり、僕が社内から応援する形の方が工合がいい。いそいでいるんだよ」というわけで、そういう運びとなつた。

この久保田は木場の育ちで、木之助と名のる亡き剣花坊の門人だったので、剣花坊夫人井上信子さんから喜多の就職依頼となつたのであつた。ついでにいえば、その時から五年後、総力戦下の木材統制法で材木屋も個人営業が許されなくなり、伝統をほこる深川木場も商榷奉還という羽目になったとき、木場問屋組合の指導的な人物二人だけがやっと天下りの下つば官僚の古手にまじつて統制会社の並び重役級に名をつらねたとき、「仇花を二つ咲かせて枯れる蔓」「飛び乗りをささえて叱るバスガール」と、どこに向けようもない不満をこう詠んでのけるくらい腕を示したこともあつた。もう一つつけ加えれば、木材通信社というところは、社長が大逆事件ごろアメリカ西部で岩佐作太郎らと活動したアナキスト、副社長と編集長は三・一五に関係したコムニスト、他にも

「赤旗」の編集に携わったのや、組合や学生運動から転向して出獄したような経験者が多く、当時としてそういうことが就職のじゃまにならぬめずらしい場所であった。支局を加えて三十人ほどのうち、半分ちかくもそういう経歴者だった。戦争とともに改名や統合などを経て新聞は大きくなり、日刊を出すまでに大きくなったが、故人となった岡部隆司、山越瓊や、無政府共産事件の人たちや、ずっと後には関根弘、花田清輝、岡本潤らもそこで一時を凌いだことがあった。

その年の九月はじめから、鶴は私について木場をあるいた。行きとかえりに、私は材木屋の符牒や主な生産地とその特徴などを、自分もまだ駆けだしながら、いくらか説明できるようにになっていた。

そのころ鶴は反戦的な「しゃもの国綺譚」の連作川柳を、たしか「川柳と自由」に発表して、その次号に私がみじかい作品評をかくことになった。

昂奮剤を射たれた羽叩きでしゃもは決闘におくられ
る

稼ぎ手、をんどりを死なしてはならぬめんどりの守

り札

賭けられた銀貨を知らぬしゃもの眼に格闘の相手ば

かり

決闘のしぶぎにまみれ賭けふやされた銀貨うづ高い
しゃもの国万歳とたほされた屍を蠅がむしってゐる
をんどりみんな骨壺となり無精卵ばかり生むめんど
り

をんどりのいない街へ貞操捨て売りに出てあぶれる

支那事変がはじまって騒然と好戦的な空気にわきたつなかで、鶴の並ならぬ反戦意欲の高揚があるが、しかし私は二つの面からこれらの作品には賛成しかねた。比喩が手っとりばやすぎる。これは国の権力階級と民衆とをしゃもの親方としゃもにたとえてみせたというそれだけのことにはすぎないではないか、非文学的すぎるじゃないか、という意味の批評を私はかいた。その私の思いのなかには「これでは検閲の目が光る、検閲の目をくぐりぬけて民衆の胸にとびこむのでなければ川柳の値うちがなくなるじゃないか」といったものがあつた。非文学的にすぎる、という感想をうらがえせばそういうものだった

た。「しゃもの国綺譚」についての私の意見は、いまま
そう変ってはいない。

私の内部ではそのころ一つの、極めて低姿勢な詩の方
法であったが、それがようやく定着しかけていた。「現
実をもって語らせる」というやり方である。これをその
時期の方法論として積極的に述べたのは丹沢明（青柳
優）で、それを作品で成功してみせたのは小野十三郎で
あった。小野の作品から丹沢が理論的解説を得たのかも
しれないという面もあった。階級意識をもつ詩人がこの
時代の世相に当面して作品をかくとき、まだ、とかくプ
ロレタリア詩の生な怒号めいた口吻がのこっていたり、
見えずいた比喻になりやすかった。これは弱く低く、検
閲の目にもひっかかりやすい道理だ。しかしわれわれの
現実には憤怒の事態ばかりがある。そこを詩人は憤怒に
かられて描くのではなく、憤怒に値する現実を積極的に
巧みに掴みだしてみせることに、詩人の意欲と情熱を打
ちこまねばならない。積極的な反抗精神は内部にあって
燃焼し、その高熱度の意欲にもとづいて、いっそう冷静
に現実をみつめること、現実の諸事態をふわけして、そ
れを再構成することによって、現実そのものをしてさけ

び声をあげさせねばならない。以上のような方法を私も
すすんで自分らの詩の上にわがものとしようと努力して
いた。その位置から鶴の川柳をよむとき「しゃもの国綺
譚」よりも、同じ誌上に発表された鶴の

稼ぎ手を殺してならぬ千人針

銀針に刺された蝶よ散る花粉

の方が、まだすぐれているのではないかとも考えるので
あった。そのころの反戦的な川柳には、プロレタリア詩
に身を近づけたような、左翼意識の過剰なものが多すぎ
たので、いくらか意固地に鶴の作品を、以上のように批
評した気味もあったかもしれないが、私は自分たちがと
りつつあった詩の方法で彼らの川柳に立ちむかったよう
におぼえている。

私のこんな批評を続んだ久保田木之助が「盲爆じゃ
ね」といったので、私が「なアに猛爆だよ」とやりかえ
して、三人でわらった。街頭には千人針のおかみさんや
娘が立ちならぶようになっていた。

木材通信社の最初の応召者の送別会るとき、みんな意

外にお座なりの激励演説をやることに腹が立ってきた私が、こんな挨拶をしてしまった。「おまえみたいな弱虫は、弱虫なりに、いくさになったら木のかげや馬の腹の下にかくれて、何としてももどつてこい。気のいいやつはあわてて飛び出してよく戦死するそうだから、気をつける。」ところが社長が「この言葉によって乾杯しよう」といいだした。そのあとで鶴は私のところにきて、肩をたたいて、見直したぞ、とひやかしたりした。仕事場での鶴の記憶はこれくらいしかない。彼はそんな私の話で、川柳評をかかせる気になつたかもしれないとおもつて

いる。その「しゃもの国綺譚」を今日になつて読むとき、うまい作品ではないが他の気の利いた反戦作品にくらべて、並たいていでなく強力ななんかがあるようだ。なるほど鶴彬のものだな、とおもわせる力のようなものがある。鶴の川柳は作句の技巧もすぐれていることがわかるが、今日なお読むにたえるものがありとすれば、それはその作品をつらぬいているあるはげしきのためである。

そのはげしいものを、鶴はみじかい二十九年の生涯をかけて我がものとして来たのであろう、と彼の略歴をよみながら、彼との、深くもながくもなかつた交友を回想

してみるのである。一口にいえば、止むときのなかつた反抗的な生涯である。はじめは家にたいし、やがて伝統川柳にたいし、昭和十年前の新興川柳にたいし、さいごにはわが国家権力と軍にたいしてである。そして反戦の川柳作家ツルアキラとして死なねばならなかつたのである。

喜多一二——鶴彬は明治四十一年（一九〇八）十二月に石川県河北郡高松町に生れ、二—三歳で同町の叔父の養子となり、小学校はよく出来たが、資産がありながら希望の師範学校にも入れてもらえず、女工十人ばかりをもつた自家の織物工場の手つだいとなり、働く女工たちの生活のくるしいことを見た。土地柄で仏教を好んだというが、金沢地方の新聞に短歌俳句をやたらと投書しているうち、十七歳ごろから川柳をつくりはじめ、すぐに当時新興川柳一方の存在だった田中五呂八の神秘主義的でモダニズムな作風にひきつけられて仲間となった。「暴風と海との恋を見ましたか」という句などが当時のものである。まもなく家を捨て大阪に出て町工場の労働者となり、「ぼくは頭脳で考えるよりも胃袋で直感した」と後日自ら回想したように、生活のために喘ぐ身と

だったが、その時期に森田一二が「神秘的傾向の反社会性を指摘しつつ現実的な社会批判の短詩としての川柳」を主張して田中五呂八と論争したことは、労働者鶴にとつての転換期となった。大阪から一度郷里にかえったが、勿論養父の家にはなかった。大阪へ出奔するまえからナップ関係の読者会などをつくり、人をあつめる力のあった彼の帰郷は、露骨に警察から圧迫されて、昭和三年上京して剣花坊の許に身をよせ、「川柳人」に「僕らは何を為すべきか」をかいて川柳人としてのその後の方向をはっきりと打出したのは二十歳のときである。

鶴が東京杉並馬橋の柳尊寺に人目を忍んで半年以上もすごしたのは、三・一五と四・一六の中間の国領伍一郎らの十月事件というのに関係があったためだろうと青木英夫は推定している。翌年は実母の再縁先深川の滝井家を足場として日雇労働者となって働いた。昭和五年一月金沢の第七連隊に入営、三月十日の陸軍記念日に連隊長が軍人勅諭を読みはじめや「連隊長、質問がありませう」と大声して第一回の重営倉入りとなり、その後も彼の行動は中隊長を三度まで更迭させ、つづいて軍隊赤化事件となった。大演習のときに反戦ビラをまいて検査さ

れたとも伝えられるが、その仔細ははっきりしていない、また外部と連絡して労働新聞などを入手していたのが演習の留守に発見されたためともいわれている。軍法会議の結果、一年八ヵ月を大阪衛戍監獄に入つて、合計四年の兵営生活のさいごまで二等卒ですごして、昭和八年末に除隊したときは、衛戍監獄の寒中水風呂などの虐待で、とつぜんからだが痛み、ぶつたおれた彼の全身に紫色の塊が盛上るといふ奇怪な持病の主となつていた。

彼の生涯の、政治的なまたは組織的な活動については、彼の研究者たちも未知の部分が多いといつてゐる。除隊から昭和十二年の支那事変までを、一方では井上剣花坊・信子に協力して「川柳人」の刊行に努力し、戦闘的なといふべき作品と評論を発表しつづけた。この間川柳を短詩芸術として文学雑誌、詩雑誌の上に進出させることに努力し、実績をのこしている。彼の評論の現在わかっているものの量は約三〇〇枚に及ぶが、大方が論争に終始している。

支那事変が起つてから一ヵ月後の昭和十二年八月に召集されたとき、「日本国民のため献身します」と含著のある挨拶状を知人に発して十三日に金沢師団に入隊した

が、即日帰郷となった。上京して木材通信社に久保田木之助をたずねて職を求めたのは、その直後に当る。

アカハタの長谷川英夫の記述では、木材通信社内の鶴彬は「その言動はきわめて辛らつな何者も恐れない尖鋭さを示し、沢山いた偽装転向組から大分敬遠されていたようだ」とあり、青木英夫も『獄中の鶴彬』にこれを引用していたが、鶴がそこで働いたのはわずかに三ヵ月、なにも他人をひんしゆくさせるほどはげしい言動が必要だった理由はなく、慣れない木材商売の記事の作成に追われていたことであつた。鶴はこの木材通信社から、その年の十二月初旬のある朝、出勤を待ち伏せていた特高のために警視庁に連行され、その日のうちに野方署に留置されたまま翌年夏赤痢になって看視付で豊多摩病院に入院し、九月はじめにそこで死んだ。

鶴の検挙の理由は「しゃもの国綺譚」などの反戦的作品のためではないかと、ながいこと私は推量していた。また剣花坊亡き後井上信子が発刊責任者となつていた柳誌「蒼空」に加える弾圧として最有力の活動家である彼が狙われたのだとも考えられた。このどちらもまちがつてはいないが、直接の動機が、大阪の柳誌からの反戦川

柳とその作者を明記しての告発のためであつたことが、戦後になって、当時同じように検挙されて半年近く留置された同人広岡義明その他の人々から明らかになつてきた。文学上の論争と対立がもっとも劣悪な形をとつた一つの例である。

「伝統を標榜する通俗的な川柳」によつて告発された所謂進歩的な川柳はそのころどんな仕事をしていたかといへば、支那事変前後の好戦的空氣の下で、烏三平はこのような発言をしている。

川柳というピストルがある。恐らく玩具のピストルであろうとは、誰にも考えられたことであり、またそうであつたのも事実である。少くともある特例を除けば、男一匹の手にすべき程のものでなかつたことに間違ひはなかつた。それがそうでなくなる為には、川柳家井上剣花坊の三十年の柳壇的生活が必要であつた。いや剣花坊をめぐる進歩的な作家群の存在が必要であつた。三十年の歴史は玩具製作が現代科学の粹をあつめた技術のすばらしい進歩とともに一方武器工場に變じた歴史であり、川柳が短詩の一ジャンルを確立する

までの歴史である。

川柳というピストルがある。試みにひきがねを引いて見給え。

からくりを知らぬ軍隊が勇ましい

ごうぜんと音はしたが、たまは当たったか、当らぬか？

もうけるものが居て大砲がまた撃たれ

タンクは偽装され、ほのかに晩鐘アッンツィンク

三平がこうかいたのは二・二六事件後、支那事變の一年まえであった。

ほぼ同時期に鶴彬は「俳句性と川柳性」について述べたなかで

いわゆる俳句が自然現象詩として現われたことは、

現実の生活葛藤をよそにして花鳥風月にたわむれていられる有閑層を地盤としていたことなのであるし、その反対に川柳が人事を諷刺せざるを得なかったというのは、金銭や身分や愛欲の人間生活の矛盾のうずから抜けだすことの出来なかった勤労層を土壌にしていた

ためにほかならない。

人間諷刺詩の川柳から、小ブルジョア・インテリの懷疑や苦情を反映した神秘川柳が生れたり、自然象徴的の俳句から、進歩的インテリや勤労者のイデオロギ―をあらんだ現実俳句がとびだしたりするのも、少しもふしぎはない——

とあって、三平のいう反戦的な川柳に達するため、即ちもっとも大きな、現実的な社会と民衆民族の問題である「戦争」ととりくむためには、あるいは自然現象を、あるいは人事の日常生活の哀歎をそぞろにとりあげてきた川柳が、如何に脱皮すべきかを、川柳性の發揮という面でとらえようとしている。

この時期に鶴が立っていた場所は、プロレタリア文学の足場とほぼ同じ所である。とすれば二、三年まえに作家同盟が解散していた昭和文学の歴史をふりかえれば、鶴らの到達はおそきに過ぎるという感もあるが、その頃二十七、八歳の彼は、そのときまでに約十カ年の川柳人としての歩みをもち、通俗といわれる田舎川柳から、田

中五呂八らの、大正末としてはごく新しかった「カント的、ショウベンハウエルの、ベルグソンの、西田幾多郎の哲学のカクテルによつぱらった生命主義—人間主義—主観主義の川柳」を卒業し、「また木村半文銭などによつて特徴的であった東洋犬儒主義を憧憬する鬼貫的、芭蕉的、神秘主義的川柳など」(ともに鶴彬の言葉)をこえて、いわゆる新興川柳から抜け出て、「剣花坊をめぐる進歩的な作家群」のもっとも優秀な川柳作家へと到達しつつあったのである。

人々は、川柳といえ古くは柳樽の面白い人間喜劇的なものを連想し、近くは講談雑誌や商業新聞やラジオのおかしくて腹をかかえるような軽口川柳を想像する。

「それらの川柳によつて眠気をさますことのできるものは醒ますもよい。需要するものが存在するかぎり、供給するものはほるびない」(鳥三平)という自負は貴いとしても、実際は「それらの川柳」の方が圧倒的に大量にかつ広く生産され伝播されてきたなかで、川柳は大正末期以来、他の芸術・文学の変化進歩の過程と同じく、第一次大戦後の新しい芸術活動の洗礼をうけて、まず主観主義のものが生れ、そこをつきやぶつて現実の生活直視

からつきあげてくる批判精神と階級的自覚にもとづく戦闘的な作品が、少数ながら尖鋭に生れ出ていったのである。江戸川柳も創始から約二百年の歴史がこれを生誕させ、昭和十年〜十二年のわずかな期間に、元氣な鶴彬はこの川柳活動の頂点にたたされたのであった。

川柳とは何か。非芸術の文学である、という考え方が私のなかでちらちらするのだが、その正否を解明出来るほど私は川柳をしいてはいない。しかし、その発生した徳川時代の川柳にこんなものがあつた。

人は武士なぜ傾城けいせいに忌がられ

仏師屋をしても弘法食へるなり

武士が世の中を支配していた時代に、はだかになつた武士が必ずしも庶民に勝るものでないことをいい、弘法様も庶民の列にひきさげて痛快がつて溜飲りゅういんをさげるといふ、ただこの程度のことかせいぜいの心のやり場であつた時代の庶民的産物。田舎者にたいしては江戸人であることを誇り、道徳や常識が權威とみるものをあざわらう